

4 - 13 中国東部・近畿北部・北陸地域における地震活動（1976年7月～1976年12月）

**Seismicity in the Eastern Chugoku, Northern Kinki and
Hokuriku Districts, Southwest Japan(July, 1976-December,
1976)**

京都大学防災研究所 鳥取微小地震観測所 北陸微小地震観測所
京都大学理学部 阿武山地震観測所
Tottori Microearthquake Observatory and
Hokuriku Microearthquake Observatory,
Disaster Prevention Research Institute;
Abuyama Seismological Observatory,
Faculty Science; Kyoto University

中国東部・近畿北部地域の地震活動については、従来、鳥取微小地震観測所と阿武山地震観測所が別々に報告してきた。

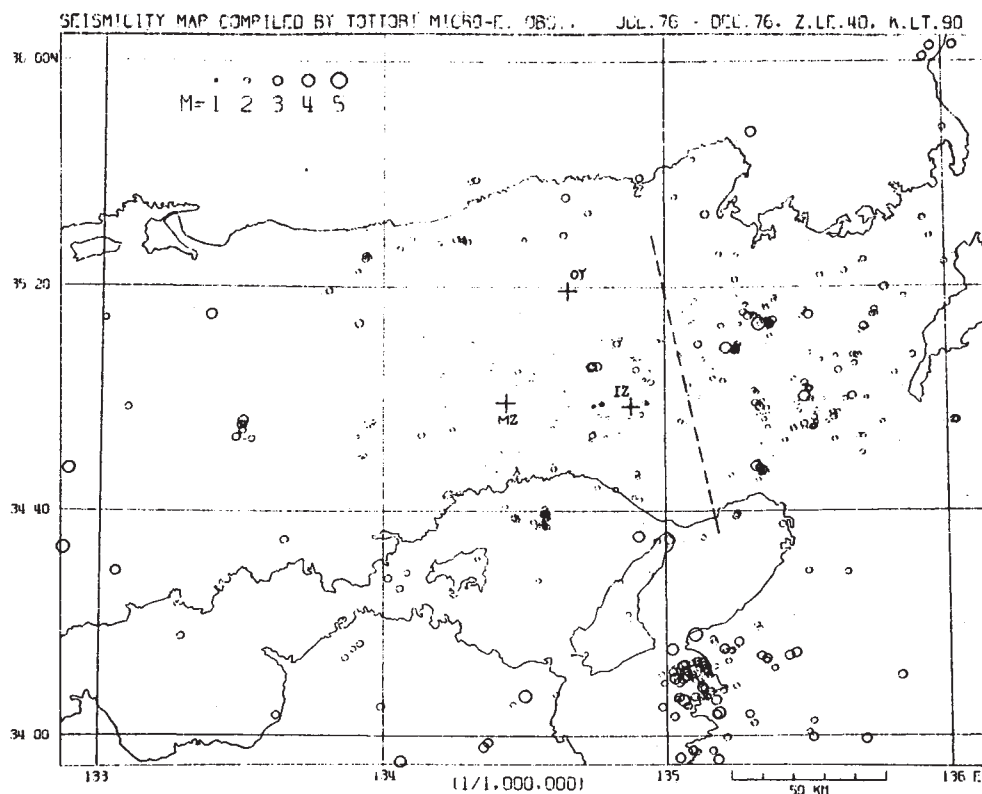
1974年度には阿武山地震観測所が、1975年度には鳥取および北陸両微小地震観測所がそれぞれテレメーター化され、阿武山では2年、鳥取・北陸では1年が経過した。阿武山については、管下衛星観測室での観測は、有線あるいは無線によって阿武山に送られ、一括して観測および処理がなされる。鳥取および北陸観測網については、すべて有線によって観測の鳥取・北陸本所への集中化がなされる。更に、両観測網から3カ所ずつを選び、計6カ所の上下動成分が、宇治市の防災研究所にテレメーターされている。

震源やマグニチュードの決定は、3観測所において、ほぼ即時に処理することができる。従って、特異な地震活動の発見と対応とは、委託観測時代に比べて飛躍的に向上したといえることができる。このようにして、阿武山、鳥取、北陸の3観測所におけるテレメーター観測が軌道に乗ったので、今まで個別になされていた各観測所の地震活動の報告を、できるだけ統一した形式で行うこととした。ただし、これは常時地震活動の定期報告についてであって、個々の問題については各観測所がその都度報告する。

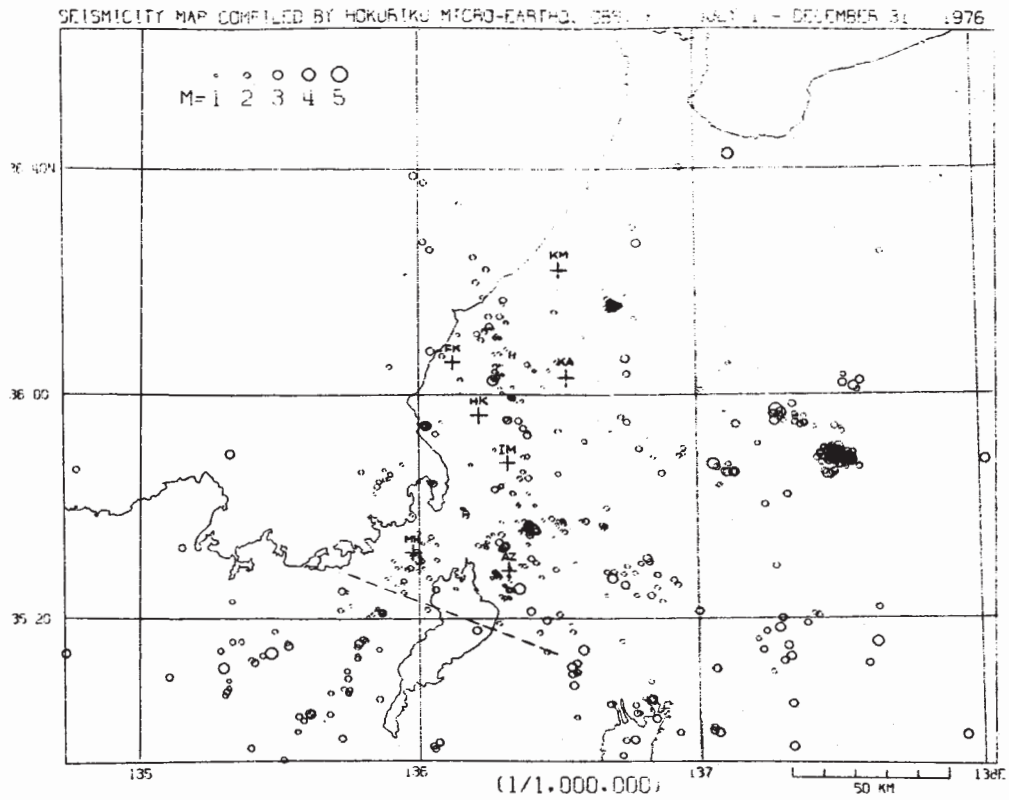
発表の形式としては、期間は半年毎とする。地図は原図では100万分の1の縮尺でXYプロッターを用い、3枚を重ね合わせて簡単に全域のサイズミシティを把握できるようにしてある。マグニチュードの表示は、原図では、Mの大きさを直径（mm）とする円で表わす。第1～3図は1976年7月～1976年12月の半年間のサイズミシティ・マップである。

地震のピックアップの基準（規模や震央距離についての）や、集録に当たってのトリガーのかけ方などは各観測所の研究上の要請によって必ずしも同一ではないから、3枚の図が全く均質であるとはいえない。しかし、各観測網からあまり離れない範囲では、M2程度以上の地震については、ほぼ均質なマップと見てよからう。第1～3図に書き入れられている点線は、各

観測網の大体の境界線である。これらの線を境にして3枚の図を継合わせれば，中国東部・近畿北部・北陸のサイスミシティ・マップを作ることができる。なお，境界線附近では2観測所による震央がダブッているが，比較的大きい地震について2つの震央を比較して見れば，観測網の周辺部での震源決定がどの程度の信頼度を持つかを推定することができよう。

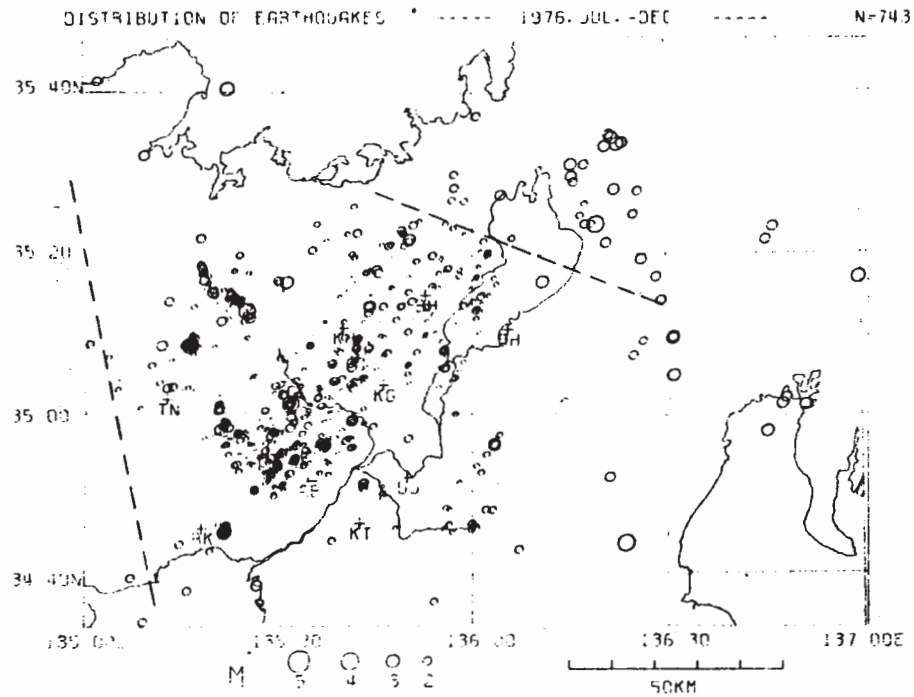


第1図 鳥取微小地震観測所による震央分布図。1976年7月～1976年12月。
Fig. 1 Seismicity map by the Tottori Microearthquake Observatory. July, 1976-December, 1976.



第2図 北陸微小地震観測所による震央分布図。期間は第1図に同じ。

Fig. 2 Seismicity map by the Hokuriku Microearthquake Observatory. July, 1976-December, 1976.



第3図 阿武山地震観測所による震央分布図。期間は第1図に同じ。

Fig. 3 Seismicity map by the Abuyama Seismological Observatory. July, 1976-December, 1976.